

題名：血液型性格判断の科学的説明

緒言

血液型性格判断の始まりは1927年に『心理学研究』に発表された、教育学者古川竹二の『血液型による気質の研究』である(古川 1927)。その後1932年に『血液型と気質』(古川 1932)が出版され、血液型性格判断が注目されるようになった。しかし研究が進むにつれ、例外が多すぎることから信憑性は低くなり、古川の学説は否定されるようになった(松田 1994)。その後能見正比古が1971年に一般向け書籍「血液型でわかる相性」(能見 1971)を出版し、テレビ番組でも血液型性格判断に関する内容が報道されるようになり、血液型性格判断は大流行した(上村,サトウ 2006)。その時問題として浮上したのがブラッドタイプ・ハラスメントである。これは血液型で相手の性格を判断し、それによって相手を不快にさせることである「ブラッドタイプ・ハラスメント」という言葉は海外から始まったもので、日本の奇妙な習慣として海外記事で紹介された。一般的に多いのがB型に対するもので、B型はわがままで、自己中心的だなどと報道されることが多かった。つまり血液型性格判断の浸透でB型はわがまま、自己中心的であるというイメージが定着していたのだ。このような問題が起きるのは「ステレオタイプ」によるもので、これは多くの人に浸透している先入観や固定観念のことである。この「ステレオタイプ」は血液型性格判断が広く信じられている理由の一つである(上瀬 2002)。また、広く信じられているもう一つの理由は「バーナム効果」で、これはあいまいな表現で誰にでも当てはまりそうなことを、自分にしか当てはまらないといわれると、それが真実だと信じてしまう現象である。「バーナム効果」はアメリカの心理学者ポール・ミールが名付けた心理学用語である。このように血液型性格判断が広く信じられるようになった理由は主に「バーナム効果」や「ステレオタイプ」など、心理学関連の根拠によるものである。しかし心理学分野から血液型性格判断を調査した研究は多くが個人作成のアンケートによるものや、被験者の少ない実験によるものであり、信憑性が高くないと考えられる。そのため、今回はあえて心理学の分野を外し、より科学的な側面から血液型性格判断が浸透するに至った理由を調査、考察していく。

方法

CiNii、Google Scholarで血液型ごとの違いに関連する論文を調査する。また、文献も利用し、同様の内容について調査する。なおその時、血液型ごとの性格の違いをアンケート調査などで得たものは、「ステレオタイプ」や「バーナム効果」の影響がある可能性を否定できないため、使用しないこととする。

結果

まず血液型の違いの由来である。藤田(藤田 2006)によると血液型は赤血球の表面に

ある糖鎖の違いから生まれる。また、血液型が「血液型」と呼ばれるのは、血液の中に血液型物質があるからである。A型はA型物質を持ち、B型はB型物質を持つ。AB型は両方の物質を持ち、O型はどちらも持たない。しかしどの血液型もH型物質というものを持っている。H型物質はN-アセチルグルコサミンがガラクトースと繋がり、ガラクトースがフコースと繋がっている。この糖の集まりが基本となり、A型にはこれにA型物質を特定するN-アセチルガラクトサミンが繋がり、B型にはもう一つガラクトースが繋がっている。AB型はA型の集団とB型の集団を共に持っている。O型は先ほども述べたとおりどちらも持たず、H型物質の糖の集まりのみを持つ。つまりH型に付随する血液型物質の種類によって血液型が決まるのだ。

小川（小川 2002）によれば、これら血液型物質は体中に存在するが、脳室系には存在しない。血液脳関門が遮断するからである。血液脳関門は血液と脳室系を満たす脳脊髄との間で特定物質を遮断するためのもので、ほとんどタンパク質を通過させない。糖はタンパク質にくっついているため、血液脳関門を通ることができないのである。そのため脳に血液型物質が存在しないのだ。

藤田（藤田 2006）によると、このABO式血液型は腸内細菌が作ったとされている。まず、人間は自分にはない血液型物質に対する自然抗体を血清中に持っている。この抗体はからだの中に細菌などの抗原が侵入してきた時に、からだを守るために生成され、その抗原にだけ反応するタンパク質である。その抗原にだけ反応するのは、「免疫トレランスの法則」による。これはつまり、自分自身が元々持っていた血液型物質に攻撃を与えないために存在する。A型はB型の血液型物質に対する抗体を持っているが、このB型血液型物質に対する抗体がB型の血液型物質に対してのみでなければ、A型の血液型物質も攻撃されてしまうからである。そしてこのような自然抗体をそれぞれの血液型の人を持つようになったのは、腸の中にいる細菌がABO血液型を持っていたから、ということである。

先ほど免疫トレランスの法則について述べたが、それによるとO型はA型物質B型物質それぞれに対して抗体を持ち、反対にAB型はどちらに対する抗体も持たないことになる。

考察

結果で述べたとおり、血液型ごとの免疫の差によって病気のかかりやすさが異なる（永田 2013）。それぞれほかの血液型に比べ、A型は様々な癌やノロウイルス感染、B型は肺結核や肺炎、O型は胃潰瘍、AB型は梅毒や肺炎などにかかりやすい。また、O型は様々な病気にかかりにくく、それに比べA型は病気にかかりやすい。そのため、A型は病気を悪化させないため、他人と協調し、ストレスが溜まりにくいように変化していったのではないだろうか。また、病気を引き起こす原因を避けるため、普段から些細なことに気を遣い、神経質と呼ばれるようになったのではないかと考えられる。一方O型は病気にかかりにくいと、あまり細かいことに気を遣わない大雑把な性格になっていったのではないかと考えられる。また、血液型物質の抗体づくりにはリンパ球が向けられるのだが、先ほど述べたようにAB型

が最も抗体が少ないため、リンパ球が少なく、反対に顆粒球が多くなる。この顆粒球が多いと、感受性が強くなる。そのため AB 型は感受性が強く、他の血液型の人とは少し違ってみられるのではないか。なお、今回の調査結果では B 型がわがままであるという結論に至る明確な結果は得られなかった。しかし、日本で多くの割合を占める A 型と O 型の血液型性格判断における性格特徴には、B 型は血液型が違うため当てはまらないと一般的に考えられ、多数に属さないことから「わがまま」であるとされている可能性も否定できないと考える。以上の考察より、「血液型性格判断は科学ではない」と結論付けるには早計であり、血液型が性格に影響を及ぼしている可能性は否定できない。しかし脳室系に血液型物質がないことから、血液型が性格を決めると言い切ることは不可能である。よって、未だ血液型性格判断は疑似科学の域を脱していないが、研究の余地がある興味深いテーマであると考え。

引用文献

古川竹二（1927）血液型による気質の研究,心理学研究,2,4

古川竹二（1932）血液型と気質,三省堂

松田薫（1994）「血液型と性格」の社会史-血液型人類学の起源と展開,河出書房新社

能見正比古（1971）血液型でわかる相性,青春出版社

上村晃弘,サトウタツヤ（2006）疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性,パーソナリティ研究,15,1,33-47

上瀬由美子（2002）ステレオタイプの社会心理学,サイエンス社

小川紀雄,仙波純一（2002）脳の健康科学,放送大学教育振興会

藤田紘一郎（2006）パラサイト式血液型診断,新潮社

永田宏（2013）血液型でわかるなりやすい病気なりにくい病気,講談社